

日本人の文化と精神の研究

第2回 「サクラ」の花と日本人の美しさ

★ 外国人観光客の言う日本の美しさ

私は、よく外国からいらっしゃるお客さまに「日本は美しい国」というほめ言葉をいただくことがあります。ここでいう「美しい」とは、さまざまな意味合いがあるのではないのでしょうか。

ひとつには「伝統や文化の美」と言うことだと思います。たとえば、世界最古の木造建造物である法隆寺をはじめ、大きな戦乱の少なかった日本には、奈良京都を中心に古い神社仏閣が多く、それに伴った文化や芸術品も数多く残っています。現代の新しい建物や芸術品は、それは豪華でカラフルで、非常にすばらしい美しさがあります。しかし、日本の「伝統や文化の美」には、長い年月がなければ醸し出すことのできない「荘厳さ」「美しさ」そして、それを長年、何代にもわたって守ってきた日本人の心が、現在存在する芸術や文化の中に映し出されてきています。この「伝統や文化の美」は、もちろん他の国にも歴史のある建造物や史跡はたくさんあります。しかし、日本独特の文化や様式の美しさは、日本にしか存在しないものなのです。

また、ほかの意味での「美しさ」もあります。

よく言われるのが「秩序と規律の美」と言うことではないのでしょうか。日本人の秩序と規律に関しては、前回にも詳しくお話ししましたが、しかし、現在日常的にそのような日本人の美しさが身近な部分で見ることができるとされており、その内容が「美しい」と言われることがあります。前回のお話では、震災の大変なときにも秩序だって列を作って配給を待つ被災者の皆さんの話を書きました。そのような非常事態のときでも、日本人は世界を感嘆させるくらいの秩序や規律性を重んじる部分があります。しかし、そのような非常でない、もっと身近な日常の部分にもそのようなところが見えるのです。たとえば、「道にごみが落ちていない」とか「自転車置き場の自転車が整然の並んでいる」など、われわれ日本人が毎日目にしている「当たり前」と思うことが、外国の人々からは「整然として美しい」と感じる部分があるようです。

外国の観光人の方にカメラを渡しておく、さまざまなところにレンズを向けてシャッターを切っています。もちろん浅草の雷門など、観光名所などで記念撮影をするのは、日本人も同じですが、日本人ならばなかなか写真を撮らないところ、たとえば、公衆便所がきれいだったから、または、拝観をするときに下足を脱ぐが、その下足が整然と並んでいるからとか、または、公園のゴミ箱にごみを捨てる子供の姿が自分の国では見ることができないなど、外国人が「美しい」と感じる日本人の行動は「整然」「秩序」「清潔」という

ような単語であらわされる部分が少なくないような気がします。

しかし、なんといっても「日本が美しい」という言葉でもっとも強く言われるのは、「自然の美」ではないでしょうか。日本は、日本人にとっては当たり前になっていますが、世界では珍しく「四季」のある風土を持っており、また、緑が多く、砂漠化したところの少ない、水の多い国土なのです。日本人にとっては当たり前のことが、外国から来た人々にとっては非常に美しく感じる。日本人がハワイなどでハイビスカスやオランダのチューリップを見て「日本にはない美しさ」を感じるように、外国のお客様は、日本に来て「自分の国にはない美しさを」感じるのです。

日本の四季には四季折々の「色」があります。冬はやはり「雪の白」そして、春は「若芽の淡い緑」または「桜のピンク」、夏は抜けるような「空の青」そして、秋は「紅葉の赤」と言った感じでしょうか。他の色を想像した方も少なくないかもしれません。しかし、日本人の場合、四季折々にその里の色を思い浮かべることができます。赤道直下など四季のない国ではなかなか感じることのできないものなのではないでしょうか。そして「色」を感じるだけでなく、その色から、さまざまなことを連想し、そしてさまざまな事を感じることができる。それこそ、もっとも大きな日本人の財産なのかもしれません。

★ 新たな季節の始まりである「春」

三月から四月にかけて、ちょうど日本は「花見」のシーズンになります。春の季節の「桜のピンク」は、まさに日本を代表する美しさであり、そして春の象徴的な色でもあります。

日本の場合、雪に閉ざされた里から、徐々に若芽が芽吹き、そして梅の花の香りがほんのりとわれわれを包み、次に桃の花がまさに「桃色」の花でひな祭りを祝い、そして桜が満開を迎えるということになります。東北や北海道では、雪の季節から一気に暖かくなるので、桃と桜が同時に咲いたりもしますが、それはそれで、東北の風情と言うものではないでしょうか。

しかし、梅・桃・桜と続く花でも、「花見」と言えば「桜」です。日本人は花といえば桜という感覚が根付いています。他にも花はたくさんあるのに、桜は日本人には特別な感慨を持った花であるということができないのではないのでしょうか。

日本人は「桜」が咲くと「春が来た」と思います。日本では季節の変わり目に「節分」があります。現在では二月の初め、立春の前日を節分というのですが、本来は、「季節の分け目」の日であるから節分になるのです。現在、二月の節分がことさら「節分」と言われるのは、江戸時代ぐらい、町人文化が華やかな頃、新しい「春」を迎えるにあたって、「邪鬼を払い福を呼び込む」という一種の悪魔祓いのような儀式があったのです。

平安時代では、節分の行事は宮中での年中行事であり、『延喜式』では、彩色した土で作成した牛と童子の人形を大内裏の各門に飾っていました。その宮中儀式が江戸時代になって武士、そして町人の世界に降りてきます。すべての季節を行うのは難しいので、一年の

春夏秋冬の新しい季節が始まる時である春の節分に、「鬼は外・福は内」と掛け声をかけて豆をまき、そして、柊の枝に鯛の頭を刺したものを、宮中の土人形の代わりに飾ったり、あるいは恵方巻きを食べたり、と行うを行っています。

では、なぜ「春の節分」だけが現在まで残ったのでしょうか。

これは日本人が「稲作を中心にした農耕民族」であることが非常に大きく関係しています。日本人は古くから「何もないところ」に「種をまき、水をあげると芽が出る」と考えています。何もないところから新たなものが生まれることから、古代では「地母神信仰」が土着の信仰として根付きました。古代の儀式に使ったとされる「土偶」がほとんど女性を形作っているのは、その信仰心の現れであるとされています。

稲作やそのほかの植物に関しては、「春」が新たな芽の出る時期です。要するに「新たな命」の生まれる時期であり、その時期に、この新たな命がしっかりと育つように、そして実を結ぶように、春にはさまざまな儀式を行います。

日本人は、新しいことを始めるときに、そのことを神に報告し、そして良い結果が得られるように祈ります。初詣は、まさに「新たな年の始まりに、一年無事に過ごせますように」ということですし、建物を建てるときの地鎮祭などは、「これからここに、建物を建てるので、土地の神様にそのことを報告し、そして温かく見守ってほしい」ということを土地いらしやる神様に対してお祈りするのです。

その意味で、まさに「春」は新たな季節、新たな春夏秋冬が始まる季節であり、それまでの、すべてのもの（植物）が枯れてしまっている冬から、次の作付けが始まる時期ということになるのです。そのために、春の節分は、特に重要とされていました。日本人のこのような「新たな季節の始まりに、福を呼び込む」という感覚は、町人の間にもすぐに理解されるようになり、現在に残ったのです。

なお、少々余談になりますが、収穫のときは当然に豊穰祭があります。よくある「秋祭り」はほとんどがそれにあたります。そのときは「今年は豊作をありがとう、そして来年もよろしく願います」と言う神様への感謝の感覚を持っているのです。この話は秋の季節に改めていたします。

★ 春の花「梅」「桃」そして「桜」

このように、日本人は新たな季節の到来である「春」を待ち望み、厳しい冬の間を耐えていたのです。節分の後、まず花を咲かせるのが「梅」そして、次に3月のはじめ頃に花をつけるのが「桃」です。いずれも、日本を代表する花とって過言ではないでしょう。

梅といえば、すぐに思い起こされるのが平安時代の菅原道真です。身分の低いものが出世できない貴族社会の中において、清和天皇の実力主義で登用され、位を極めて左大臣にまでなるのですが、それまでの貴族にねたまれて、讒言により大宰府に左遷されてしまい、その地で亡くなってしまいます。菅原道真が京の都を去るときに、彼が好きであった庭の

梅に対して詠んだ歌は有名です。

「東風吹かば 臭ひおこせよ 梅の花 主なしとて 春をわするな」

この歌から、菅原道真の京都の邸宅であった、現在の北野天満宮から、大宰府まで梅が飛んできて根を下ろしたという「飛び梅」伝説もあるくらいです。奈良時代までは、「花」と言えば、節分の後はじめに咲くこの「梅の花」でした。万葉集で「花」とかかれた和歌の多くは「梅の花」について詠まれたもので、桜の花について詠まれたものの三倍近くあります。

「桃の花」に関しては、何しろひな祭りを「桃の節句」というくらいです。日本では、それぞれの季節に、身の穢れを祓うという意味で「五節句」と言うものがありました。

人日(じんじつ)/陰暦正月七日「七草がゆ」、上巳(じょうし)/陰暦三月三日「桃の節句」、端午(たんご)/陰暦五月五日「端午の節句」、七夕(たなばた)/陰暦七月七日「七夕祭り」、重陽(ちょうよう)/陰暦九月九日「菊の節句」、がそれにあたります。平安時代、上巳の節句(桃の節句)の日に人々は野山に出て薬草を摘み、その薬草で体のけがれを祓って健康と厄除けを願いました。この行事が、後に宮中の紙の着せかえ人形で遊ぶ「ひいな遊び」と融合し、自分の災厄を代わりに引き受けさせた紙人形を川に流す「流し雛」へと発展してゆきます。そして、その後、武士の世の中、町人文化の中でも、高貴な生まれの女の子の厄除けと健康祈願のお祝いとしての「桃の節句」が、庶民の間にも定着して行ったお祝いが「ひな祭り」です。

そのお祝いは、まさに桃の節句として、桃の花の咲く頃に行い、春を祝うものとしてカラフルな菱餅や雛あられを飾るのです。カラフルなお菓子が「春」の訪れを人々に知らせる大きな祭りになったのです。

そして、春と言えば「桜」です。

「古今和歌集」に収録されている在原業平朝臣の詠んだ歌が、もっとも日本人の心をうまく表現しているのではないのでしょうか。

「世の中に たえてさくらの なかりせば 春の心は のどけからまし」

奈良時代は、節分から最も先に咲く「梅」が花の代表でした。しかし、菅原道真が遣唐使を廃して、日本が大陸の天平文化から、徐々に国風文化が盛んになると「花」と言えば「桜」になってくるのです。嵯峨天皇は、ことさらに桜の花が好きで、盛大な花見を行ったということが伝わっていますし、平安末期の西行法師が、「花」すなわち桜を愛したことは有名で特に「願はくは 花の下にて 春死なん そのきさらぎの 望月のころ」の歌は、彼がその歌の通りに入寂したと言うことも含めて、多くの人に知られているのです。

桜は、周りに葉をつけることなく、桜の木一面がピンク色に花が咲き誇ります。その美しさは、日本人だけでなく、外国の方も見ていただければすぐに理解できるでしょう。一面がピンク色になった満開の桜の花は、まさに日本の美しさの象徴であると言えるのではないのでしょうか。

★ 日本人の好きな桜の潔さ

そして、もうひとつ、日本人がこの桜の花が好きなのは、「花の美しさ」が「長く続かない」ところなのかもしれません。在原業平朝臣の歌と同じ古今和歌集に、世界三大美女の一人に数えられる「小野小町」の歌があります。

「花の色は うつりにけりな いたづらに わが身世にふる ながめせしまに」

この歌にあるように、「少々の長雨を眺めている間」という、ごくごく短い間に「花の色は色あせてしまった」という歌です。まさに、花の美しい時期は一瞬で、そして、その美しさを残すことなく、すぐに散ってしまう。逆な解釈すると、「雨が降って止むまでの間くらい短い期間で、花が散ってしまう」ほどはかないのが桜の花、とすることになるのです。

このことから、日本では古くは「女性」の代名詞として「桜」が使われました。小野小町の歌は、まさに、「花の色」と言うように桜の花のことを詠んでいるように見えますが、同時に、自分の女性としての美しさのことを詠んだ歌としても解釈されます。「花」＝「美しい」＝「女性」という、美しい、しかし、その美しさはある意味で一瞬で消えてしまうものと言うことに、より一層の美しさを感じるのです。「今しかない」最高の美しさを感じると言うことは、まさに、桜にとっても人にとっても、最も良いことなのかもしれません。その「瞬間の美しさ」を日本人は非常に大事にしているのです。

桜の花のはかなさは、さまざまな物語に書かれており宇治拾遺物語集の巻一の十三話「田舎の児桜散るを見て泣く事」では、比叡山の僧侶がそのことを示す話が出ています。

もちろん、「はかないからこそ美しい」という感覚は、ある意味日本人独特かもしれません。しかし、外国の人には「もっと長い期間美しい花を見たい」という事を聞くこともあります。しかし、日本人には美しいものをあまりに長く見ていると飽きてしまう、一瞬の「匂」を味わうことこそ「粋」であると言うことを感じるもののようです。美しい花を待ち、そして暖かい春に恋焦がれて、同時に、その光景を思い描いて、寒い冬を耐えているからこそ、花の美しさはより一層引き立つものですし、また、その花が今しかないと思うから、その花を「目と心に焼き付けて」美しい記憶の中にしまっておく、そして来年また新たな桜の花を見ることを待つことができるのです。あまり良い例ではありませんが、のどが渇いているのを我慢して、夜のビールのカンパイを待ち、一口目ののど越しを楽しみにしている気持ちを思い出していただければよいかもしれません。

逆に、どんなに美しくても、毎日同じ花ばかりでは飽きてきてしまいます。花を女性に例える風習のある日本ですから、花そのもののはかなさについてよりも、女性に関して、江戸時代にはかなり不謹慎な話が残っているのです。江戸時代に流行した都都逸に「目についた 女房このごろ 鼻につき」というものがあります。江戸の風物詩などを注意深く見ていると、花見の時期にこの都都逸が歌われたという世相があったようです。それまでは恋焦がれ、毎日毎日その女性のことを思っていたのですが、いざ結婚して毎日同じ顔を

見ていると、徐々に鼻について欠点が見えてくるようになる、と言うもの。まさに花も女性も「はかなく、美しい時期が短いこと」が重要なのかもしれません。

花のはかなさで、もうひとつ日本人が桜に例えるもの、それが「武士道」です。

山本常朝の「葉隠」には「武士道とは死ぬことと見つけたり」と書いてあります。このことから、すぐに「ハラキリ」などと短絡的に考える人が少なくないのですが、本来はそのような意味ではないのです。

桜では開花のみならず、散って行く儚さや潔さも、その美しさの中のひとつです。古くから桜は、諸行無常といった感覚にたとえられていますし、その、ぱっと咲き、さっと散る姿ははかない人生を投影する対象となってきました。まさに、「武士道」でいう「死ぬこと」と桜の「潔く散ること」が、重なって、武士道と桜が結びつくことが非常に多くなり、武士の世界の中で、桜の花のように生きる生き方が最も美しいとされたのです。

しかし、武士道と結びつけると、どうしても「散る」ことばかりに目が言ってしまう。しかし、そもそも「死ぬ」事は「生きる」事があるから「死ぬ」ことになるということがお分かりになるでしょうか。江戸時代の国学者、本居宣長は日本人の精神性に関して「敷島の 大和心を 人間はば 朝日に匂ふ 山桜花」という歌を詠んであらわし、桜のそのような「美しい生き方」が日本人の精神の基調にあるとして紹介しています。そもそも、「死ぬことと見つけたり」とは、「死ぬ瞬間に、自分は後悔せず、誰にも恥じない生き方をしたか」と言うこと、そして、「死ぬときに、この世に未練を残すような先延ばしした生き方をせず、毎日精一杯生きてきたか」と言うことが武士道の基本にあります。他の花も咲いては散るのですが、しかし、桜のように、咲いているときは多くの人の目をひきつけ、立派に咲き誇り、そして、散るときがきたら、未練を残さずに潔く散る。本居宣長の歌に詠まれている「朝日に匂う」とは、まさに「控えめでもしっかりと良い影響を残す」と言うことに他ならないのではないのでしょうか。

このように「散る」と言うことだけでなく、「咲いているときの美しさがあるからこそ、散り際の潔さがより一層はかなく、また咲いているときの美しさを際立たせるものだ」という考え方があり、そして、女性、そして日本人の生き方そのものに大きな影響を与えたのが桜の花ということになるのではないのでしょうか。

★ サクラは神様がいらっしゃるところ

では、「桜」はなぜ「サクラ」と言うのでしょうか。

日本では、稲の神様を「サ」といいます。ですから、稲を植える女性を「サ」「乙女」要するに「早乙女」と言いますし、稲の神様のお食事は、「サ」の「餉（ケ）」で「サケ」、要するに「酒」といいます。よく神社などで使われる「サ」の「垣」を「サカキ」要するに「榊」を使って、神様と人間の住むところを分けているのをご覧になった方も少なくないのではないのでしょうか。

さて、では神様は、里に下りてきたときにどこにいらっしゃるのでしょうか。「サ」が座る場所「座」があります。この「座」と言う文字、天皇陛下が儀式を行う場所を「高御座」とかき「タカミクラ」とよみます。まさに「座」を「クラ」と読むのです。そこで「サ」の「クラ」で「桜」、要するに、神様がいらっしゃる場所として、「桜」があるのです。

春になると、さまざまな植物が芽吹きそして新たな命が生まれます。その新たな命は、神様によって与えられると考えられていました。その神様は、桜の木に「座って」しばらくいらっしゃる、そして、桜が散る頃に、雪解け水のきれいな川沿いに土筆などの若芽に命を吹き込むのです。神様の与えた命で、植物は強く育ってゆきます。そして、人々に恵みを与えてくれると考えていたのです。

植物が育つ、もうひとつの重要なものが水です。だから、神様がお休みになられるところは水辺が良いのです。それだけでなく、神様がいらっしゃる桜の花びら、散って水辺に浮かびます。桜の花びらは、それまで神様が座っていたところですから、当然にきれいなはずです。要するに、水辺に桜を植えることによって、桜の花びらが散って水に浮かぶことによって、その水も浄化すると言うことが考えられていたのです。

神様が与えた命に、神様が座った花びらで浄化された水、まさに、日本の神様の力の結晶であると言うことになるのです。

春は、このように、日本においては神様が植物に新たな命を授けるとき。そして、その神様が里に下りてきて、厳しい冬を追いやり、そして暖かい太陽をつれてきます。その神様がいる場所が「桜」であり、そしてその神様のいる植物の美しさが「桜の花」と言うことになるのかもしれませんが。その神様は忙しいので、すぐに次の場所に行ってしまいます。そのために、国生みの伝説のある高千穂を含む九州から、徐々に東に、そして北に移動してしまうのです。今の世の中で「桜前線」と言っているものは、昔の「神様が通った道筋」と言うことになるのではないのでしょうか。

そして、桜の花が咲いているものを見て、昔の日本人は「神様」と「春」の訪れを感じていたのかもしれませんが。そして、神様が宿る桜の花を見て、やはり体の中から新しい命を芽生えさせる女性を連想させ、そして、また、日本人全体の命や精神性までも感じていたのかもしれませんが。

日本で「花」と言えば「桜」。まさにそのことは、日本のこのような伝統や文化そして日本人の精神性からきている話なのかもしれません。

ただし、そのようなことをまったくわからなくても、満開の桜の花を見れば「きれいだ」「美しい」と思うのは、世界の国と共通の感覚なのかもしれませんね。桜のそのような意味を知っていることと知らないこと、そのようなことに関係なく、花は咲きようはまったく変わりません。日本の美しさの代表のひとつである「桜」について、たまにはこのような知識を持ちながら見てみるのも良いのではないのでしょうか。

